

東京カテドラル聖マリア大聖堂

東京都文京区関口

「建設×史材」では今号から1年間、「金属」の土木・建築構造物を紹介する。

美しい曲面のステンレスを照らす初春の陽光は、陽だまりのように穏やかだった。ステンレスは屋根を兼ねた外装として全面を覆う。その輝きは、社会や人の心の暗闇を照らすキリストの光とされる。8面のHPシェル（双曲放物面を利用した一体構造）は垂直に天空を目指し、互いに支え合い頂部で十字架を描く。造形の美しさと眼前に広がる圧倒的な内部空間は、世界中の建築家から賞賛を得た。設計者は丹下健三。国立代々木屋内総合競技場と同じ1964年に完成している。この2施設で日本の建築は世界の建築を凌駕しトップに立った、と建築史家・建築家の藤森照信氏は指摘している。

歴史をさかのぼると1899年に聖母伝語学校「^{まいかい}玫瑰塾」付属聖堂として建てられ、1900年に関口小教区の聖堂、1920年に東京大司教座聖堂となった。当時は木造ゴシック式の聖堂。1945年の第二次世界大戦の東京大空襲で焼失したが、ドイツのケルン教区の支援によって再建設が決定し、前川國男、谷口吉郎、丹下の3人の指名コンペの結果、頂部の十字架型などで異彩を放った丹下案に決まった。

構造・規模は、RC造HPシェル地下1階地上1階（一部3階）延べ3,649㎡。大聖堂最高部で39.41mの高さを持つ。大聖堂に入ってすぐ眼前に広がる巨大な空間は、祭壇に柔らかに差し込む光を伴って、丹下の門下生である榎文彦氏が言うように荘厳そのもの。8面のHPシェルの内部壁面はコンクリート打ち放しで、重なり合いながら頂部十字架型のトップライトまで連なり、見事な上昇感覚を生み出している。工事は想像に違わず困難を極めた。特に大壁面の形状を保つために、ピアノ線を縦横に張り巡らせての墨出しによる精度管理、大型重機のない時代の外装ステンレスモールディングの取付けなど、当時の技術の粋が結集された。

丹下は、自身の作品のなかでこの建築が最も気に入っていたと言われ、逝去した2005年、本人の希望通りここで葬儀・告別式が営まれ、遺骨は地下の納骨堂に眠っている。



2006～2007年、外装とトップライトを全面改修。外装材は耐候性のあるフェライト系ステンレスに変更し、光の反射もダークで深みのある輝きとなった。トップライトは外壁に雨を流すフラットな断面などに変えている。カトリック東京大司教区カテドラル事務所の平野功氏は、「内部空間は竣工当時のままで改修していませんが、58年経った現在もひび割れなどは全くありません」と話す。

